

『嚴幾道与熊純如書札』ノート（二）

中 下 正 治

前稿に続く本稿は、一九一六年から一九一八年に至る間の嚴復から熊純如宛書信の抄訳である。この時期は、中国人が半植民地から脱却して自立する意欲を、暴発の一撓ではなく思想的方向性を内包しつつ、持続性を持つ運動として行動において表現した一九一九年の五・四運動が潜在的に発酵しつつあった時期に当るから、嚴復の書信をその現実と対比させることによって、嚴復の晩年期における思想的立場を明確に理解できるし、啓蒙思想家としてのかれの内奥に秘めた意識を類推する一助ともなるものと考えられる。この時期における嚴復の思考の特長は、政治的には復辟問題への傾斜と英雄待望論の強調であり、思想的には儒教への回帰である。このため若い弟子熊純如との間に嚴復の嫌悪する共和主義者孫文をめぐるの評価に懸隔が生まれ、叱声を加えることが多くなつて、文章に嚴復のいらだちを感じさせる部分が見られるようになるのもこの時期である。

もう一つ特徴的なものは法家路線の強調である。かれの場合この路線は前記の英雄待望思考と表裏をなして中

国救亡策として思考されているもので、書札第四九号の「中国目前危難、全由人心非、而異日一線命根、仍是數千年來、先王教化之沢、足下記吾此言、可待驗也。但此時天下洶洶、而一切操持權勢者、皆是奴才、所謂地醜德齊、莫能相尚。必求平定、自当先出曹孟德・劉德輿輩、以收廓清摧陷之功、而後乃可徐及法治之事。足下以為何如」などはよくその志向を示すものである。

つきにかれの志向する法家路線と儒教への回帰心情との関連であるが、帝国主義時代の世界において、後発国ドイツ・日本のような独裁的富国強兵策の必要性を痛感した嚴復が、その政策を中国に適用する思想的根拠として申商始皇を対置させたものであって（書札第四六号）、あくまでも現下の中国救亡の方法論としてとらえたもので、心情的な儒家傾倒との間に矛盾を示すことはない。これは若年から中国的官僚社会の中で高級官吏への道を、その育ちの故に能力あって塞がれて切齒し続けてきたかれのうっ積した思考が、高級官僚より、より士大夫的意識を育成した結果が、儒家と法家の関係を「法者以輔礼」（孫希旦『礼記礼運篇』注）すなわち階級維持のための礼を補完するための法と無意識的に觀念化された結果、両者の並存に矛盾を感じる必要もなかったからであると考えられる。

- ※〔書札番号・発信地など〕欄の記載順序について①雑誌『学衡』本がつけた書札番号。②カッコ内の号数は『一四二四年刊、成都龔尹耕輯刊』本がつけた書札番号、③書信発信年月（筆者の推定）、④書信発信地、⑤嚴復年齢、⑥書信総字数、⑦カッコ内の数字は当該書信から、王蓮常編『嚴幾道年譜』（民国二五年、商務印書版）に引用された字数、⑧雑誌『学衡』の号数、⑨カッコ内の番号は、雑誌『学衡』当該号が掲載している書信数（書札番号で示す）

※書札番号 発信地など	嚴復より熊純如への書札梗概	嚴復略伝及び関係事項
第二一号 （二六号） 一九一六年 六月初、北 京より。（嚴 復六四歳） 総六五二字 （二五五） 雑誌『字衡』 一〇期掲載 分（書札番 号一九一三 号）	<p>○馮国璋・張勳・張作霖らは、知識もなく、今日の何の世たるか、法律の何たるかを知らず、感情事に用い縦恣自如たり。歌童舞女屋に列して環侍し、糧を盗み餉を蝕すること数百万に至る、その人をもなお軍人の資格あるや。○かつて袁世凱を望み無きものといえるも、決して根本上より完璧を要求せるものにはあらざるなり。ただ權を得、政を行つてより以来、袁は軍政をほしいままにし、財政を樂觀視して、四・五年來の紛乱をいよいよ増すのみなれば、他に何をか望まんやと思えり。今日の辭職の如き天の中國を助くにあらざるばあらず、また袁の幸にあらずんばあらず。○今日の阻害は南方に起義せる孫文ら諸公にあらずして、上海の各種諸政客にあるが如し。（一）中山約法の復活、（二）解散せられた衆議員の召集、（三）袁帝制の禍首の処罰は、かの輩の要求するところなるも、その心底知るべからず、たゞ他日極端に到らば又武力もて問題を解決することとならん。○現時の焦点は財政を越ゆるなし、政府は百万外國に貸を乞うも議の成るなし。然りと雖も政府の現金支出を抑制してより収支紛乱して底裏尽く暴露せらる。中國人に財政を管理するの道德的能力な</p>	<p>○六月六日、袁世凱死 ○六月一〇日、唐繼堯 ら南方軍務院の名義 で北京政府に解決時 局辦法四條を提出 （一）民國元年の約法 復活、（二）民國二年に 解散された国会復活、 （三）帝制の禍首一三人 の処罰、（四）軍事善後 會議の召集 ○帝制の禍首ハ楊度、 孫毓筠、嚴復、劉師 培、李燮和、胡英（以 上を六君子という）</p>

ければ、ついに問題を反駁并護すべきもなきことと成り、かくて外国による財政の監督遂に事実となれば、エジプト、朝鮮を継ぐものとならざるは、殆んど稀なるのみ。あゝ中国の亡ぶは一人一人に責あり。

第三号

(二七号)

六月、北京

より。

総一〇二四

字(六〇一)

○奉新の諸人（民党の諸公のこと）その物たるや、本より堯舜の世に容れられざるも、乱世に当りて時にありて一刀両断の用あり。例えば民国二年、山東省議會資金の調達を急ぎ、孔子廟林及び四配（顔子・曾子・子思・孟子）諸墓の森林を切りて売ることを建議す、群不逞奇策となして通過せしむ。孔子の子孫大恐し急ぎ周自齊山東都督に謁す、都督いわく、「われは行政官なり、通達来れば執行あるのみ」と。子孫やむなく奉新者に援を乞う、奉新者奮髯抵机していわく、「一草木たりとも動かさんと欲するものあらば殺して許すなし、都督・議長たるを問わず」と。此の洪水汨乱の秋に当り孔孟の勢力固よりいうに足らず、然れども数千年の古蹟を保全するは各国とも同じきをなすなり。奉新者のなすところ未だ人心の死せざるものなり。故に吾弟（熊純如）のこれを驕奢淫佚・貪酷暴戾・無知無識と謗るはわれも皆しかりとなす、然れども此の類の人をして社会に勢力を持たしめて人の帰付するところとなさしむれば民

朱啓鈴、段芝貴、周自齊、梁士詒、張鎮芳、雷震春、袁乃寬（以上を七凶といい、

合わせて一三太保ともいう）

○六月七日、黎元洪、大總統代理に就任

○六月九日、張勳主催の第一次徐州會議、

ねらいは北洋軍閥の各省軍事攻守同盟組織にあった。また、復辟問題も討論されたとの謠言あり

○六月二九日、黎元洪臨時約法の復活、国

党諸公も宜しく自ら反省すべし。○賢者「方今世界大通し、欧化の輸入は止むべきもなし、吾国の東西に遊学するものに万人に達す。劣敗優勝此れ代わり興るべきものなり」という。われも又然りとなすと雖も、異とすべきものあり。外国の報章、此の類の新進を排撃して余力を残さず、私利を顧みて必ず国家に禍いするものという。しこうして吾人が深惡痛絶する袁世凱を、タイムズはその死日に大論説を登せていう「ただこの人のみ東方の事を定む、その福なきを惜しみ中国の乱いつ止むかを知らずと。その論説の同じからざること此の如し。その故にまた深く長思すべし。○変法にて興るは日本なり、亡びたるはトルコなり。天時・地利・人事の三者交わりてその因となる、此中の消息至微なるに狂妄者のみ誓約高論す。奉新者の如きは固より最後に失敗ありて天然の淘汰に帰すものなり、然れどもこの物は猶陰陽二電の如く陽消えざれば陰も又退くことなきものなり。○吾輩今垂老の日に於て危亡の機を目撃し、挽急の図をなさんと欲し早夜思維するも術無きを苦しむ、又半開通の少年酔夢中に漿を求め酒を乞うを見るは眞に人をして死を祈るも得ざらしむ。絶対に敢て信ぜざるものは、中国の地形民質を以て共和は存立し得るとなすものなり。梁啓超もまた共和は必らず亡国に至るといふ。あゝ今にし

会再開を宣布。段祺瑞を國務總理に任命

○段内閣の閣僚

内閣には国民党の右翼分子がいる、もとは君主立憲派から国民党に入った投機的政客である。また進歩黨員も入閣している。この時期、国民党はすでに解体してその左翼は中華革命党という一種の秘密団体を組織していた『北洋軍閥統治時期史話』第三冊、一九頁、以下『北洋史話』

<p>第二三号 (二八号)</p> <p>七月、北京より。</p> <p>総三八七字</p> <p>(五四)</p>	<p>て当日はしいままに清室を撃排し、ひとたび毀ちて余なからしめたるは恨むべきたるを知る。</p>	<p>と略称)</p>
<p>第二四号 (二九号)</p> <p>七月、北京より。</p> <p>総一二九字</p>	<p>○八日、都下さかんに袁世凱帝制主犯者処罰をとえ黑白を分たず。兒子らは天津に難を避けよと勸む。望門投止の時に貴信を得て慰幸慰幸たり。○貴信に国勢ようやく統一に至るといふ、此言はなほ早計なるなからんや。○われ生平かるがるしく虚名を得たり、名は造物の忌むところ、</p> <p>人は金銭を得、ある人は好官を取りたるも、われ兩者毫も有するなし、此を以て禍を蒙る、はなはだ笑うべきのみ。○まさに亡ぼんとするの国処処極端に走る、ポーランドの前史鑑となすべし。</p> <p>○国事言うべきなし、東鄰(日本)耽耽として災を幸とし禍を楽しむ、しかれども挙国狂子、大抵虎となり狂をなすを自ら知らず。梁啓超・蔡鐸の諸公、凡人中の勝れたるものなれど、他日にその事を顧みて深くなすところを悔やむも及ぶなきのみ。○欧戦、英仏露に進歩ありと雖も、独はなほだ破るにやすからず。終局を見んと欲すれば老いて幾何の金銭</p>	<p>○七月一四日、嚴復等を除き、八人に帝制禍首処罰令発令</p> <p>○嚴復が処罰令名簿から外された理由</p> <p>南方が提出した一人のうち五人は北京政府によって名簿から除去された。嚴復は劉師培とともに「当代多くは得べからざる人材」という李経羲の保証によって起訴を逃れた『北</p>

(なし)	<p>を要するやを知らず、文明科学の終に至るところ、その人類においては此の如し。故にわれ今日わが国聖哲の教化を回觀するに、早に此に及ぶを見ずんばあらず。すなわち彼の族と同じからざるところなり。</p>	<p>洋史話』第三冊、一七頁</p>
<p>第二五号 (三〇号) 八月、北京より。 総一四〇六字(なし) 雜誌『字衡』二期掲載分(書札番号二四、三〇号)</p>	<p>○今日の局面の收拾すべからざる由来を問えば、その原因多し。袁世凱は勢によりてこれに抜きん出たるにすぎず、その勢を造成せるものにあらず。勢を造成せるものは、清室その消極面をつくり、康(有為)梁啓超)その積極面をつくりて、二者合して大乱遂に成らざるを得ざるの勢となる。○民国初年の諸公、漩渦混浪の中に在りて、為さざらんと欲すもあるいは得べからざりき。光緒宣統の間、朝廷のなすところほとんど一事として亡国ならざるなく、武昌の失守に帰す。貴信に馮国璋軍、勝に乗じて江を渡らば、革命党讓歩して君憲成るべしという、この言固よりなり。ただ袁世凱氏の胸中早に企図あり、且つ唐紹儀をして和議団を上海に行かしたるは、これを借りて衆議の帰するところを見んと欲すればなり。唐氏、民党の伍廷芳と会談し、ただちに共和の局を成す。袁氏の初旨本よりこの如くならず、半ばは唐氏の欺くところなり。かくて袁のために孫文の辞職を運動して總統を以て袁に属せり。これを継ぎて</p>	<p>○七月一日、唐繼堯ら軍務院解散を宣言 ○七月六日、北京政府各省の將軍・巡按使を督軍・省長と改名し、名簿を發表 ○主要な督軍 張作霖奉天・張懷芝山東、閻錫山山西、馮国璋江蘇、張勳安徽、蔡鍔四川、陸榮廷広東、唐繼堯雲南 ○八月一日、国会再開</p>

ゆけば、その勢帝制にあらざれば自ら止まらざるものなり。袁氏旧物を満人に奉還するの意なく、而して満人の復辟を望むなきゆえんのは、人心すでに去り、国中の反対者蜂起せる故なり。○夫れ満清入関以来東胡種中国の主たり、暴君乱世を明・元に較ぶれば稀なり、しかれども奸臣の幼君を欺くも、国民の中これがために太息扼腕するもの絶えて少し。○清朝の自ら招くものと雖も従来新聞を出し執筆する諸公の大いに効力ありといわざるを得ず。先に日清役より後、梁啓超主任たる『時務報』、戊戌政変後の『清議報』『新民叢報』および『国風報』、何ぞ一として清政府に難をなすものにあらざらんや。清朝を指して窮凶極悪一日として存立を許すべからずとなす。ここに於て頭腦簡單なる少年・民約に醉心せる留學生・時流追求の官僚万弓を一斉に放つに及び堤防尽く崩る。大風起りて悔心萌し、これより梁いわく「われの極悪痛絶とせるものは政府にして、皇室は保護せり」と。ああ梁任公中国に生れて読書万巻を破りて、なおわが国の制を知らず、皇室政府は別ちて二となすを得ず、その新学に誤まるる深しというべし。公筆をとる時、その実心に救国の意浅く、出頭風（出しゃばり）の意多し、公筆端を以て社会を攪動するも惜しむらくは社会をして清明ならしむるの術なければ、救亡の本旨にお

○梁啓超が経営した新聞・雑誌

中外公報（日刊、一

八九五年、北京刊）

時務報（旬刊、一八

九六年、上海刊）

清議報（旬刊、一八

九八年、横浜刊）

新民叢報（半月刊、

一九〇二年、横浜刊）

新小説（月刊、一九

〇二年、横浜刊）

政論社（月刊、一九

〇七年、上海刊）

国風報（旬刊、一九

一〇年、上海刊）

庸言報（半月刊、一

第二六号
（三十一号）
九月末、北
京より。

いて又何をかなすや。且公は共和は則ち必ず亡国といわざるや。然らば今日の最難問題は何術もて共和を離脱するやにあり。わが垂老百思するも善術なし。○黎元洪・段祺瑞二公道德皆高し、然れども国を救い存を図るには断じて此の如き道德もてよく有效とするところにあらじ。今日の中国は秦始皇帝・曹操・管仲・商君などの政治家ありて救うあるを庶幾す。今日政治の唯一の要義は対外よく強、対内よく治、用いる方法は其の次なり、惜しむらくは賢弟のマキャベリー、トライチュケの書を読むあたわざることなり、もしこれを読まば貴信の議論少しく異なるべし。

○われの袁世凱を憎むは不義を行いて不辜を殺し、為すべき外強内治を夢到をもせざりしことなり。袁氏の行事にて最も中外を佩服せしめたるものは、国会を解散せるの一事と日本の要求を抵制せるものにして、利刃もて乱麻に対するの能あり。

○生平莊子を累読して厭わず、その説理の語、往々今に至るもその範圍を出ずるあたわず。莊子曰「名、公器也。不可多取。仁義、先王之遺廬也。止可以一宿、而不可以久处」（『莊子』天運篇）。莊子の仁義を今日に生かしむれば、平等・自由・博愛・民権の諸学説をいうべし。又曰「儒

九一二年、天津刊）
大中華雜誌（月刊、
一九一五年、上海刊）
その他特に關係の深いもの『時報、江漢公報（『梁啓超与近代報業』）

○梁啓超の共和觀の變遷

・今日中国国民未有可
以行議院政治之能力
者也。吾於是敢毅然
下一断案曰、故今日
中国国民非有可以為
共和国民之資格者也。
今日中国政治非可採
用共和立憲制者也

総九〇〇字

(一九〇)

者以詩礼葬塚」(外物篇)と、ローラン夫人もまた「自由自由、幾多の罪悪はなんじを借りて行われり」といえり。理論を談じてひとたび死法に入らばよき処なきを知るべし。○広東人には渡来者多く、赴欧者少し、その持ち帰るもの、大抵は皆十七八世紀革命独立の旧義(ロック、ミルトン、ルソー)にして、東西の歴史、大衆の団結開化の事実を細かに見ざるものなれば、その説を以て人道唯一共順の道となし、習いてこれを行うは百利ありて一害なし。誰か大いに謬りて、然らざらと思わんや。

○梁啓超、上海『時務報』創刊に当り、われ書を送りこれを戒めて「言によるを容易とするなかれ、他日悔を致さん」と勸む。返書に「われ時の良知により随いて行なわんとす(原注：梁任公の宋学は陸王を主とす、これ極めて危険なり)、これによりて過度の談をなせり、学識長ずるに至り自ら過当なるを知る」という。最近の中国士大夫、その旧学において表面語のほか心得なし。本国の倫理政治の根源盛大の処また真知なし。故に新説に対するや、無理偏執の頑固ならざれば、変化に迎合の隨波をなす、何となれば心の中に主とするところ無きが故なり。

第二七号

○国事肺病を病むが如く、人久しからざるを知るも、ただ潰瘍の破るる

(一九〇五年著の「開明專制論」『飲水

室文集』六冊、六七

頁)

・非我能亡前清、而前清自亡也。前清爲自亡、彼其政治之狀態、實以不適而不能自存。天演淘汰之作用、固応如是也。

今茲革命、雖曰種族革命与政治革命並行。種族革命、遂以告円満之成功。政治革命成功否不知何日。

若夫悲觀者流之説、睹此橫流、追原禍始

<p>(三二号) 一〇月、北 京より。</p>	<p>総四二五字 (八九)</p>	<p>日を知らざるのみ。黎元洪は偽善者にして政体・国民・民情・外勢に明らかならず、傀儡の性質をもって天位の譏を兼ね。段祺瑞は堅確にして政見黎に較ぶれば高しとなす、しかれども国のために一切を犠牲にするの觀念なし。参衆両院数百人の十に九は皆劣等の党人にして飯碗その唯一問題、明朝国亡ぶも今日争うところは党利なり。この局必ず長かるべからず、乱は且つ共和と相終始せん。今は孫文・黄興・袁世凱の流毒の窮まりなきを嘆くなり。○近日文字の登刊されるもの多し、目下北京上海の新聞は大抵粗識の無党派人にして、党より資金を受けて謠言を造り、反対する者を攻撃するを目的とす、錢尽くれば則ち事終れり、故に麻の乱るる如く、起ると雖も久しからずしてすべて尽きん。剛毅これを目して斯文同類を敗るとなす。真なるかな。</p>	<p>第二八号 (三三三号) 一月初、 北京より。 総八八四字。</p>	<p>○黎元洪・段祺瑞両公の声望極めて高けれど、われ早にその袁世凱に及ばざるを知れり。国基不安よくその艱難を救い乱世を除きてこれを正に返すものは、決して守正高尚いわゆる道徳の如きものにあらざるを知るべし。この際に当り漢の光武・唐の太宗を得れば上の上なるものなり、然らざれば曹操・劉裕・桓温・趙匡胤もまた歡迎するところなり。蓋し</p>	<p>謂共和政体万不能行於我国、至並以咎革命之非計。此其關於事理、抑更甚焉。数千年來惡政治之巢穴、為國家進步一大障碍物既已拔去。此後改良政治之余地、較前為寬、其機會較前為多、其用力較前為易。夫謂共和不能行於中國、則完全之君主立憲、其与共和相去一周年。其基礎同托於國民、其運用繫乎政党。若我國民而終不</p>
---------------------------------	-----------------------	--	--	---	---

(二〇三)

この語、もし衆に宣揚すれば必ずず人の唾罵するところとならん。○梁啓超・蔡鐸・唐紹儀・五廷芳などは西南に倡義して袁世凱の背約を責むるは名正しく言順なり。解せざるところは袁自亡の後、共和不傾の国体を建設せずして、この麻痺進行するあたわざるの政局をつくりしことなり。然らば則ち当日の起義は感情意気、あるいは自己に便ならざるを以てこれに反抗し、名は首義なるも実は天下を禍いせるもののみ。これわれの私言にあらず、試みに西文各報を見るに民党もとより許容の辞なく、隻字も梁・蔡を頌讃するものなし。

能行共和政治也、則亦終不能行君主立憲政治。若是、則吾洵劣種、宜永為人役者也（一九一二年著の「中国立国大方針」同前、十冊、七七頁）

第二九号（欠号）。一一月北京より、総八〇三字（なし）。書札内容は時事評のみ。

第三〇号（三四号）。発信月日不明、北京より。総二一二字（なし）。内容は国民党・北洋派・進歩党評。

第三一号

（三五号）

発信日不明、北京より。
○先に袁世凱の財政樂觀に、われ言をつくりて衆に対してその妄を斤けるも、今に及びて思えば袁の全く無策にあらず、今の党人の如きはこれを去ること更に遠し。○ああ、われ老いたるかな。経世変に飽き、歴史の余を読み尽し、世事の發生に深察を待たずしてその必ず敗るると決するあり。これにより計密にして迂遠となり、いたずらに悲觀を抱くの責

○八月一日、張勳、国會議員中の国民党員排斥声明。

○紛乱する北方政局
張勳を中心とする九

(なし)	をまぬがれず。然れども一朝柄を取らしむれば、その凶るところの大綱は世上の児に比べてやや実済あるべきのみ。	省同盟あるいは一三省同盟の伝聞がある一方では段祺瑞副總統説、徐世昌總理説、黎元洪驅逐説、あるいは溥儀擁立説などが渦巻いていた。
第三二号 (三六号) 一二月、北京より。	○われ年耳順を越え、中西の歴史を讀みて、天下最も危険なるは良善閭閻の人にすぎるなし、古の暴戾豪縦を以て国を亡ぼすものは、桀紂以外、隋煬帝のみ、その余に至りては皆区区柔弱にして、善良謹慎たるものなり。○わが心に憂懼たるものあり、何となれば有為の士はこれを他人に望まず、必ず身づからこれを発起すべきが故なり。われ六十の年に四を加う、病先に立ちて自ら力むあたわず、ただ浩歎あるのみ、もし年わずかに知命(五十歳)ならば、老と雖もいまだ衰えざれば、出でて事に従い殺身亡家も顧みざるのみ。君、意あり、感憤胸に満ちて書信を重ね、足下に非ずんば吾が狂言を發するなし。	○九月一日、李大釗『祈青年』二卷一号に「青春」發表 ○九月二〇日、第二次徐州會議召集。一三省代表が出席
第三三号 (三七号) 一二月、 総三三二字	○近日欧州大戰の諸書を読み、今後は種族の争なるを知る。民衆こそ第一要義なり、わが国の人口大なることかくの如し、仮に雄傑の立つありてこれを用いなば、対するものなかるべし。おしいかな此より出るを知らずして、日日小小の権利の争に従事してポーランドの後をつがんと	○徐州會議の目的 (一)国会、国民党と西南各省軍事同盟への對抗。(二)北京政府の

(なし)

す、痛むに足るものたり。(追記：本信の発信地は北京)

第三四号

(三八号)

一二月、北京より。

総九四七字

(二〇〇)

雑誌『学衡』

一三期掲載

分(書札番号三一―四

号)

〇号)

○来書に張菊生の紹介を得て康有為、梁啓超に謁せんという、大佳事なり。言論界、梁の勢力最大。康の文筆沈深にして遠く梁に及ばず、われの如きは舍を避くべし。また両公との連合を勧めらるるも連合の後われ両公に何の裨益あるやを知らず。○十年前、志士、政府腐敗の故を以て、日日鳴鼓してこれを攻めたり、しかれども事において救われたるものなく、徒らに無価値の人を借りて、生きては偉人と称し、死しては銅像を鑄造しあり、目下挙国狂うが如く、是非自ら定論無きなり。今度、イギリス公使J・N・ジョーダン帰国に当り、半日朝局を語り、今を考え昔を思いて老涙糸の如し、公使慰めて「中国四千年の根底固深の教化は無効に帰すに至らざらん。天の国を遇するは猶人のごとし、眼前の顛沛流離又はなはだ苦し、然れども眼を開き見れば玉となる理由あらずんばあらざるなり、君悲しむことなかれ」という。その言を聞きてや、破涕す。○前清の諸勲臣、大抵みな曾國藩・胡林翼の陶鑄するところにして、必ずしも尽くは賢者にしかずと雖も皆典型を有せり。近日の北洋系の諸將は大抵みな袁世凱のつくるところにして、先に法をとるところなし。又

中央集権化防止と軍閥割拠の基礎固め

『北洋史話』三冊、

六〇頁)

○張勳のねらうもの

(一)段より北洋領袖の

地位を奪うこと、(二)

徐世昌を利用して復

辟の道を聞くこと

○八月以降の対日対米

借款交渉何れも不調

○一〇月三〇日、馮国

璋を副總統に選出

○一〇月三十一日、黄興

死、四四歳(国葬)

○十一月五日、ドイツ

ポーランドに独立王

<p>第三五号 (三九号) 一九一七年 一月、北京 より。(嚴 復六五歳) 總五四六字</p>	
<p>○梁啓超京に到り各界の歡迎を受く、言によれば教育に事業を求め政界に入らずという、誠なれば大佳事なり、何となれば政界に入らば策を以て必ず毀あればなり。民国に入りてひとたびは司法に長、ふたたびは幣制に長たるも皆有言不実行たり。出仕せしむれば、元首その人にあらざるを知らず、国民の程度をも知らざる者なれば、この人実行家にあらず。然りと雖も梁は当世の賢者たり、ただいたずらに口舌を以て名を得、所持する言論往々にして攪乱者のための資となり、おのれも又よく其の後</p>	<p>紀綱敗壞の時にあたり、自由はなはだ過ぐ、これ腐敗しやすき所以なり。○欧戦、おおよそ来春夏の間に雌雄あらわるべし。両交戦国、文明の程度相等しくして、政俗実は大いに同じからず。独露は議院ありと雖も尚武にして専制なり。英仏は皆民主、民主は軍事に最も不便なり、故に宣戦後その政府みな改組す、然らざれば敗る。日本は島国なるに法を同形の英に学ばずして独を以て師となせるは、その国民程度を察してこれをなせるのみならず、またひと度英仏に学ばば、強を図るに難きを以ての故なり。わが国の形勢程度習慣、共和において実に一の合するなければ、茫然これをなして競存を争うは必ず幸なきこと決せり。</p>
<p>○一月六日、梁啓超、上京 ○梁上京の理由 上京の任務は、憲法・内閣・対独外交の三問題である。なお一月七日付『申報』</p>	<p>国樹立を宣言 ○一月八日、蔡鍔死三五歳(国葬) ○十一月二日、段祺瑞の知恵袋徐樹錚、黎段(府院の争い)対立の結果、辞職</p>

(なし)

を持するの術なきを惜しむ。重ねて歎くべきとなす所なり。○われまきに七十になんなんとす。暮年道を観る、十に八・九は殆ど康有為と相同じく、わが国の旧法断じて非なりとすべからず。夫れ人は日日に蛻化し、わが制を以て最も便なりとなさんとす、しかれどもわが国は他国睡薬するの不用物を取りてこれを述べ、また大いに異ならざらんや。これを総じて、共和国体は欧米諸国にてもまた止むを得ずして成りたるなり、必ず地上に君を求むるなきによりて此の制を行う。しかれども乱弱その常にして治法は偶然たり。メキシコ・南米諸国もつて鏡とすべし。中国に至りては地大民多くして特によろしからず、現在唯一の生機は復辟に存す。然れども極めて危険、これをして破れしむれば、後来はたゞ内訌瓜分あるのみ。おおよそ歴史の重大事は此をなすと彼をなすとは皆天意にあり、吾輩のよく予論するところにあらざるのみ(原注：他日、中国果して存するや、存する所以のものもまた数千年旧有の教化にまち、決して今日の新機にはあらず。此の言後日印証さるべし。)

第三六号
(四〇号)

○政界及び国会の唯利のみこれを見、民生を碎削すること歴史上未だあらざるところなり。前清慶那ら極めて貪汚、袁世凱氏の爪牙もまた加厲

の談話によると七つのことを述べているが、その中に「政局には入らない、十余日留京して上海で学校経営を行う」とある。〔梁任公年譜長編〕五〇七頁

○一月九日、第三次徐州會議。段支札、黎

反対を決議

○一月、胡適『新青年』

二卷五号に「文学改良芻議」発表

良芻議」発表

○二月三日、米、対独

断交

・米駐華公使ラインシ

二月北京より。

総八六七字

（一二二）

なるも今日の強鋭かえり見ざるにはしかず。世変を思うに物極るを待ちてのち返るものなり、先には挙国政理に暗く、共和の幸福を種々の美言誇辞にて輝くものとするが故に旧法を破壊するを惜しまず。今や民国すでに六年、時事かくの如し、さらに数年せば人人をして苦痛を受けて共和と自由平等の論を憎むこと蛇蝎の如くならしめてのち復古の思想起らん、これ社会振り子の原例にして如何ともすべきなし。○いま京中の三大問題は（一）復辟、（二）中独断交、（三）内閣改造なり。第一問題、外間にて聞くに、支持者は張勳・張懷芝・張作霖の三督軍。反対者は馮国璋・段祺瑞。不賛成者は宣統帝の父載灃なり。宣統は極めて有望の幼主、師を尊びて学び、書法は端美、心地甚だ明白なり。慶親王の死に当り、その家諡を請う、帝、幽厲穆靈などの字を加えんとす、師傳ら不可となし密の字を与う、これ十歳の小児のよくなすところにあらじ。現時の復辟もとより冒險の処なきにあらず。（甲）内閣なきこと、（乙）革命党は地盤飯碗を失うを慮れば反抗必ず多し、（丙）立憲帝王は実権臣にありといえども帝の壮年を待つを良策とす。○参戦問題に至りては、われ先に連合軍側に加することを『公言報』に主張せり。○欧戦は春夏の間に長雄を決せん。その後、国士世局必ず前に異り、極東諸国も必ず大いに影響を受けん。

エ、参戦要請（賛成者）段・黎政府、研究系首領梁啓超。反対者――主要督軍、孫文、康有為など（在野人を含め商会など）

○諡（おくりな）事件
突動がなくなると、彼の家から諡を請うてきた。私は謬・醜・幽・厲など、悪い文字で諡をつくり内務府に持ってゆかせた。父が反対したが突動はわいろを取って国を滅ぼしたもので、よい字はやれな

この時、中国能者舵をとり、機に乗じて利用すれば、覇を称し得ずと雖も長存すべし。その時を失すれば、人の処分を受けてのち、よく国を成すや否や知るべからず。国を成さざれば長く牛馬となり、インドを望むも得べからざらん、いわんやその余においてをや。

いと反対した。これを聞いた遺臣は英君としてほめたたえた※

第三七号（四一号）。三月北京より。総三〇五字（二七四字）。内容は中国の対独断交を有利と主張。

第三八号

（四二号）

四月、北京より。

総八一二字

（四六四）

○ロシア革命は、フランスの歴史、前にあるありて、皆知りて戒となし、甚だしきに至らざるべし。数十年の禍乱相次がしむるも、当路の人はわが国に較べて程度高ければ、中国改革後の現象に至らざらん。ただその国中員広く、中にアジア民族を雑え教育未だあまねからず、民の多くは無学なり。皇室は富民の崇拜するところたり、ツアーは教主をも兼ね。西欧人の宗教観念をわが国に較ぶれば常に深し、されど独裁に傾き、輿論熱すれば、極端に走りて共和に向うを職志となす。数時ののち行うべからざるを見てのち、折中して立憲の君主となる。これはこれ吾その歴史的国情よりの推測にして、敢て事実となるとはいわず。

○日本、変法（維新）より以来みなドイツに相随い、戦いを以て国民へ

※（溥儀『わが半世』

上巻、六六頁）

○二月、陳独秀『新青年』二卷六号に「文学革命論」発表

○三月一二日、ペトログラードに労兵ソビエト組織成立

○三月一四日、北京政府、対独断交

<p>第三九号 （四三号） 五月初、北 京より。 総八三六字</p>	<p>の聖業となし、外交は詐欺偵探を重んじ、民を教うるに刻苦競走に励むを本となす。事は国を利するに属し、邪淫盜殺も為すべからざるなし。日本の野心はドイツと同じく、平日十年毎に戦を他国と交うといい、その学校卒業生にして留学するものは大抵みな探偵なり（原注：独の兵謀の一なり）欧戦発生よりドイツの作戦、背信野蠻にして公法を犯す、ここにおいて日本もこれに鑑みてやや戒心し、陰に変計しつつあり。○本月二日、米ウィルソン大統領、ドイツに宣戦せり。わが国は第二步に到りて忽然として宣戦を中止す。聞くに、国会の党派この時期に当りて種々党を顧みて国の計画を顧みざるなり。宣戦はもとより正道なり、かくの如き政府・国会は国に益ありや真に知るべからず。交通総長、米弗五十万の大半を私し、その少半もて議員の口を鉗せりという。</p>
<p>○追記：一九一六年に 嚴復、『莊子』に評 点を加う。 ○五月七日、段政府、 対独参戦案を国会に</p>	<p>○三月一五日、リヴォフ公臨時政府成立 ・ニコライ二世退位 ・（ロシア二月革命） ○四月二日、米大統領、議会で対独宣戦要請の演説 ○四月二五日、主要督軍会議で宣戦布告を決議</p>

学説法理、今日金科玉律とするも、眼を転ずれば不要物となり、再び述べざるものとなる。たとえば平等自由民権の如きは、百年以前は第二のバイブルの如し、今やその弊日に現われて、変形せずんば乱亡の禍あり。試みに英仏政府の一年來の爲すところを見ればあきらかなり。昧者は知らず、かえってすでに棄つるの法を至宝となす。トルコの如く、中国の如く、ロシアの如し、みな変法進歩を号す。しかしこうしてトルコ破れまさに亡びんとし、中国敗軌を走り、ロシアもし共和を以てせば後禍又まぬがれず、敗弱ただに早暮なるのみ。○吾輩生れて心を用いて理を得んとせし所のものただ古書のみ、しかれども古人の義を陳ぶるもの、往々再用に耐えず。然りと雖もその中に歴史不変のものあり、時によりて利用するものあり。読書者をして法眼を具せしむれば変化の間、原則公例の鉄証あり。われ古稀に近し、かつて哲理を究観して、耐久無弊なるはなおこれ孔子の書四子五經となす。これ最も鉞藏に富むも、ただ新式機械もて発掘淘鍊をまつのみ。その次は則ち読史にしくはなし、まさに留心古今社会の異同の点を細察すべし、古人好みて前四史（史記・漢書・後漢書・三国史）を読むは、その文字を以てのみ。もし人心政俗の変を研究せんとすれば宋志最も究心によし、中国今日の現象をなす所以

提出。国会の大多数

は参戦反対

○五月一〇日、段に指

そうされた公民団が

国会を包囲、十余人

の反対派議員を殴打。

全国の輿論沸騰

○五月一八日、北京の

英文紙、西原借款の

秘密を暴露

○五月二一日、第四次

徐州會議。張勳、清朝

復辟の主張を提案

○五月二三日、黎大総

統、段総理を罷免

○五月二八日、李経羲

内閣成立

<p>第四〇号 （四四号） 五月末、北 京より。</p>	<p>は善たるも悪たるも宋人の成就するところ十に八九なればなり。</p>	<p>○五月二九日、北洋系 各省軍閥、段罷免反 対の兵諫的独立を宣 言（河南、浙江、山 東、山西、福建、陝 西、奉天など）</p>
<p>総三九〇字 （なし）</p>	<p>○袁世凱死してのち中央の権威限りあり、督軍私憤を懷きて人を用いて 政を行い、事々に難端をつくり、号令国門より出でず、国事危機なり。 一線の生機はわずかに復辟にあり、ただ輿論熟せざるによりて、皇室中 の穩健親貴もこの事を憂となす。わが意は、時期の未成熟、宣統の幼少 にかかわりなく、総理の有無にあり。試みに全国に求むるも立憲総理た る資格勢力を有するもの未だ出現せざるにあり。袁世凱は才地資力これ に当るに足る、これを捨てて図らず、妄りに分にあらざるものを求めて死 す。真に中国の不幸なるのみ。</p>	<p>○六月一日、黎、張勳 に大總統と北洋軍閥 間の調停を依頼 ○六月九日、張勳軍、 入京</p>
<p>第四一号 （四五号） 六月末、北 京より。 総四九八字 （一三四）</p>	<p>○袁世凱死し、黎元洪就職の日、われ嘗て書を段祺瑞に致し「袁氏帝制 以前の一切の号令法律を有効となしてのち、急ぎ機関を組織し、久しか るべき憲法を議定し、更に新定の選挙法によりて国会を召集し、国人と 共に一切を更始すべし」と勧告せり。当時、段氏意すこぶる動くも毅力 なく、また梁啓超輩の勧めによりて中山約法を用い、内乱の国会を召集 す。この一年、府院の齟齬、立法行政の軋轢は勢の至るところ理の当然</p>	<p>○六月一二日、黎、張 勳の強請により、国 会を解散 ・康有為、各省の独立 取消と臨時約法否定 を各省督軍に通電</p>

<p>にしていぶかるに足らず。○夏に入りて喘息やや癒ゆ、ただ老態日にますます侵潤、恐らくは久視の理なからん。身、国家に益なく、ただ虚論を存するのみを以て、すこぶる自ら恨むのみ。若きより古書を読み、立身行己、処処消極に偏し進取を潔しとせず。今に及びて悔むも晚し。</p>	<p>○六月十九日以降、各省、独立取消</p> <p>・張広建、全国宏博議</p> <p>憲会召集を建議（議員として康・梁・嚴復も選に入る）</p>
<p>第四二号 （四六号）</p>	<p>○復辟の時期固より未だ熟せず、人事も又一々が軽々粗略なれば、意中のことは成らざるなり。論旨多くその手に出でたる劉廷琛甚だ愚にして固、張勳幕中の万繩式益々愚にして、遂に大事を誤る。あゝこの類の人、生平数巻の書を読めば天下の事数著にして終るの概あり。ここを以て人</p>
<p>七月末、北京より。</p>	<p>○六月二八日、康有為農夫に化けて上京</p>
<p>総一四五二字（二六）</p>	<p>○七月一日、復辟決行</p> <p>○万繩式と康有為</p>
<p>雑誌『字衡』一五期掲載分（書札番号四一―四六号）</p>	<p>・復辟のとき、一切の大名鼎々たる清朝の遺老や民国の官僚はすべて張勳の裝飾品であり、幕中で大権を掌握したのは、大軍師万繩式であった。</p>

政を他人に与え、即日除州に帰らば、諸督軍も盟に背かざらん。しからざれば、直隸北洋大臣を曹錕に、奉天總督を張作霖に、河北總督を張懷芝に与うれば羽翼成長せん、惜乎、その計画出でざりし。○有為早に劉・万輩の決して用うあたわざるを悟らず、茫然としてこれと重大事を共にし、僥倖にたよれり。權利富貴の觀念はなお少し。康歸国以来、未だ嘗て一度も出でず。われ又何をか深くこれを責めんや。○来書に段祺瑞を論ずるはやゝ民党南人の論調に偏するに似たり。かれの人となり素朴疎簡にして手段拙粗、陰謀を以て称せられず、軍界に於て最も工夫を為すものなり。ただ陸軍に於て一将一卒の移動もその同意あらざれば不可なり。歴年用いるところは旧日の生徒なるが故に各部隊の感情に於て最も富む、近畿に於て殊に然り。○孫文・唐紹儀輩、僕より見ればただに毫も価値なき人、広州に竄逃してすでに地方実力者に入れられず、各国に号訴し、又笑止となる。その成るなき殆んど決すべし。○民党の分子、潔白にして愛国の士乏しからず、然れども改革以来二度の国会に、空しく国費を費して国事の進行に毫も裨益なく、かえって反対派の腐敗官僚・陰猾な進歩派の藉口するところとなるは、漫然として改革少し。いたずらに急進をなして、国情民俗に察を加えざるが故なり。いわんやその

・康有為は経験に乏しく、熱烈な心情でかく、参画はしたが、かれが書いた復辟後の憲政実施綱領など一切の文件は、張勳の氣にいろしものではなかった『北洋史話』三冊、一九二頁

○七月二日、黎、日本公使館に避難

○七月四日、段祺瑞、張勳討伐を発令

○七月一二日、段軍入京。張勳、オランダ公使館へ避難

領袖唐紹儀の背戾・五廷芳の老朽・孫洪伊の劣薄の如き、下りて呉景濂、谷鐘秀、褚輔成に至りては秦檜以下にして称すべきなし。僕もとより無党派、段・梁の当路の諸子に於て交感なし、然りと雖もひそかに思うに、現政府もとより失敗の時あるも、断じて国民党人の如きよく征伐するところにあらず。おそらく賢弟は南方の衆論にいざなわれて、未だ必ずしも我と眼光を同じくはせざらむ。

○七月一日、黎大總統辭職を發表

○七月一日、第二次段内閣成立

第四三号（四七号）。九月北京より。総二一九字（なし）。内容は時事評と中国統一の困難性への慨嘆。

第四四号

（四八号）

九月、北京より。

総一〇三九字（四九五）

○政局の争いは權利に外ならず、共和・君主に至りては一時利用するところの口頭禪にすぎず、醉翁の意は酒にあらず。此の十余月二年の中の内外の乱、事變の紛また何の景象を作らむ、前識ありと雖も殆んど予言し難し。○露は欧の大国にして民物土地大きく雄風といえども、大公の權を盗み、宮女政をもてあそぶ、賄賂苛法と民の不学とをわが国に較ぶるも殆んど甚しきものあり。故にアジアを蚕食すると雖も一度強敵に会えば又振わず。今はその国の半明の民、機に乗じて革命し近く共和を制定せんとす。然りと雖も治乱強弱は初め共和には係わらず。蓋し革命の

○二年十余ヵ月前とは袁世凱が帝制をもくろんだ二九一四年一月の約法會議を指すのであらう。この會議で、大總統選舉法を修正し、任期十年、再選も可とした

	<p>芟除する所は貴族のみ。民の愚闇初めは一蹴すあたわずして休明を落し、旧法の提防すでに崩れたれば忿怒の二者大いに縦まならん。フランス革命は八十年を経て初めて軌に循うも、なお盛強となるあたわず。最後は露次は中国、等しくいつの日にか向明の機あるや知らず。○独の学説治術は英仏と大いに異なる。ショーペンハウエル、ニーチュ、トライチュケ皆性悪説に本づきて民主共和を以て然りとなさず、わが国の荀子、商鞅、李斯と相似たり。異なるはただ時世の進化の同じからざるのみ、申、商、始皇を今日に生かしむれば、為すところは独と一致せん。</p>	<p>○七月二一日、ケレンスキー内閣成立 ○八月一日、馮国璋、大總統に就任 ○八月一四日、北京政府、対独宣戦布告</p>
<p>第四五号 (四九号)。九月北京より。総三三三三三 (一一〇字)。内容は時事評のみ。</p>		
<p>第四六号 (五〇号) 一〇月、北京より。 総四五八三 (三七三)</p>	<p>○南北決裂し、各々これを武力に訴う、これ勢の必至にして深く怪しむに足らず。○さかのぼりて袁世凱野心を抱きてより武人の世界を讓成せり。わが国の武人は身は行伍に列し、大抵は下流社会の民なり、真に蘇東波のいわゆる不義の徒を以て殺人の器を執るものなり。来書にいうが如く、藩鎮の禍今日に現われたり。いわんや戦場のこと、彼此兵器の輸入借款ありて外交にわたる、ここに於て密約陰謀遂に売国の道を開く、</p>	<p>○九月一〇日、広東に軍政府樹立を宣言 ・孫文、大元帥に就任 ○一〇月二〇日、湖南問題を契機に南北戦争開始 (護法戦争)</p>

<p>第四七号</p>	<p>他日事變の向うところ、人をして寒慄せしむ。○復辟の事、一現して滅す。大勢を細思するに、再計を待たずして必ず能わざる決せり。</p>	
<p>（五一号） 一〇月、北京より。 總四四八字 （なし） 雜誌『学衡』 一六期掲載 分（書札番 号四七―五 三号）</p>	<p>○日本、露の兵器を接收するが故に、年来の貧を転じて富となし、充然として余あり。この時期に乗じて我をエジプトになさんとし、交通系（交通總長曹汝霖ら。なお梁啓超は財政總長）と北洋軍中（主として段祺瑞派）の肉に迫り汁を吸う徒は、自ら富まんと欲して、日中兵器統一と揚子江鉄鉞を日本の支配下に置かんと為すの密約あり。ああこの約、果して成れば、天下のことこれより大いに定まらん。夫れ中国の軍備を日本に謀るはよろしからず。何となれば、歐戰終告の時は二年以内なり、この時、歐米の兵器多きこと山海の如く、賤なること土塊の如し。その時をまたず、貴価を以て日本より買うは、これ何の説なりや。又石炭・鉄は国脈にして軍と工はその次たり、しかるにこれを強敵に授くるは、漢民族興らんと欲するも道具をなからしむるものなり。</p>	<p>○七月二〇日、日本政府、段内閣への財政援助を決定 ○九月二八日、西原借款二千万円供与締結 ○鳳凰山鉄山問題 段の兵器借款要求にからめて日本が鳳凰山鉄山を中日合辦で開鉞することを提案 ・一月四日條約調印</p>
<p>第四八号（五二号）</p>	<p>十一月、北京より。總二六五字（なし）。内容は時事評、特に段祺瑞下野にふれて批判。</p>	

<p>第四九号 (五三号)</p>	<p>○露国強大を以て称せらるるも、作戦すれば往きて敗れざるなし。その故は兵にあらずして国の政俗にあり。このたびの革命、底裏尽く現われ、混沌たる大地、苦趣中国に過ぐ。英仏独美伊奧ハンガリーの諸国、政俗やや高く、危きにのぞみて皆救いあるべし。過小の国ベルギー、セルビア一時亡国の惨ありても他日また蘇えるべし。○吾輩より見れば、中国目前の危機はすべて人心の非にあり、異日一線の命根は、これ数千年來の先王の教化の澤なり、足下吾が言を記せ。ただこの時、必らず平定を求むれば、先ず曹操、劉裕出でて敵を敗り、功を収めてのち即ちおもむろに法治のことに及ぶべきなり。</p>	<p>○十一月七日、ペトロ グラード蜂起</p>
<p>一月、北京より。 総三十一字 (九三)</p>	<p>●ソビエト政權樹立 (ロシア十月革命) ○十一月四日、北軍 湖南戦線で総崩れ ○十一月六日、段祺 瑞、總理辭職</p>	<p>○『新青年』に掲載された婚姻問題 ●二月号：賢母氏与中国前途之關係。家族制度為專制主義之根拠論。 ●三月号：女子教育。</p>
<p>第五〇号 (五四号) 不明、北京より。 総四五〇字 (四五〇)</p>	<p>○吾国先には宗法社会を以て、また男女交際西欧と同じからざるの故を以て遂に早婚の俗あり。然して末流病国に至るは、まことにしかするものあり。今日一知半解の少年、遅婚を以て主義となさざるはなし。旧法には改良さるるものもあるも、細察すれば尽くは然りとせず、蓋し(一)父母に抵抗して旧有の権を奪うべしとすること。(二)欧風に心酔し婚前に男女交際するを自由結婚と思うこと。(三)いま新学を学ぶ少年、誰氏の子女たるを知らずして、これと終身不二の権を結ぶを甘受せざるところとする</p>	

こと。以上三因を以て晩婚を崇ぶ。東西の俗を見るに行いの簡易にして礼を守らざるによりて離婚の悲しみ多し。夫婦の道は中国においては数千年來、女の貞操を重んじ、男の娶妻は旧法に於ては至重の名義あり、すなわち祭祀を承け、二親につかえ、子孫に相統せしむるものなるを知らざるなり。今人の義を以てすれば、愛情肉欲以外に目的の存ずるなし、いま試みにいずれの法が禽獸に近きやを問えば、占礼の輕議すべからざることを知る。いま旧法の弊、時流のよくこれをいうも、ひとたび新に走りて裁制を知らざれば、その害旧に倍するを知らざるなり。

- ・五月号：女子問題之大解決。論中国女子婚姻与育兒問題。
- ・六月号：女權平議。改良家庭与国家有密切之關係。
- ・七月号：說青年早婚之害。結婚与戀愛。

第五一號

(五五号)

一二月、北

京より。

總三八五字

(三八五)

○時局此に至る、当日維新の徒、大抵責を逃るるところなし。僕、心にその危険を知るが故に『天演論』(T. H. Huxley; Evolution and Ethics, and other Essays) 訳出のち、『群学肄言』(H. Spencer; The study of Sociology) を以てこれに繼ぐ。蜂起を意欲するものやや持重すと雖も、不幸にして風潮すでに成り、朝廷の举措齟齬し。袁世凱、上に迎合して私を加え、賄賂奔競、半歩の公卿拳国飲醉、国の大綱、何事たるやを知らず。今に至りて、国家に信ずべき爪牙なきのみならず、私人もまた不変の徒党なし。○欧戰告終の後、支那の物産、各国の取るところとなり、

○群学肄言序より

近者吾国、以世變之殷、凡吾民前者所造因、皆將於此食其報而淺薄輕疾之上、不悟其所從來如是之大且久也。忽攘臂疾走謂以日暮之更張、將

第五二号

（五六号）

一九一八年

二月、北京

より。（嚴

復六六歳）

總五二七字

（二二七）

わが民の行く所は利にして征服さるるをいとわざらん。前には異民族への抵抗説もあるも、これを満人に施せしのみ。白人・日本人に施すこと殆んどなからん。何となれば能力志節語るに足らざるが故なり。○復辟の劇、あるいは再演あらん、ただ復辟をひとたび言えば旧人群集し、極旧の法にならい、私利を保たん。かくの如くすれば長きことあるべからず。今年五月と五十歩百歩のみ。

○吾人の通弊は、旧法の弊を見て新に従わんとするにあり。西人の為すところを無弊の法とし、然らざるを思わず。専制の末流痛むべしとなし共和を佳しとして、その害専制に過ぎるを知らず。婚嫁の旧法、女子を生きにえになすとして心傷むるも、新法の自由は男女の幸福に益少きを以て、初めて世間一切の法みな弊あるを知る。福利の多寡は民徳民智の高下に帰す。わが国この苦痛を経たるのち、群の力を致すところを知らん。○熊希齡に連邦の説あり、連邦には独制・米制の別あり、独は上に共主あり、下に封建あり、わが国これが基礎なし。米は民権に本づくも、わが国にこの基礎なし。わが国に有するものは諸督軍にして、督軍連邦は連横合縦にすぎずして、乱るるに足らざること決すべし。

可以起衰、以与勝我高也。不能得、唐突号呼、欲率一世之人与首進以為破壊之事、顧破壊宜矣。而所建設者、又未必其果有合也、則何始稍審重而先咨於学之癒乎。

○十一月一日、西南派、梧州會議。黎の復職、馮の下野要求

○一二月二日、孫花園會議（督軍團の復活、

曹錕を盟主として西南派に对立）

○冬、嚴復、喘息で北

京法国病院に入院

第五三号（五七号）。二月、北京より。総二四六字（なし）。内容は時事評。日本のシベリヤ出兵について。

第五四号（五八号）。三月、北京より。総四四七字（なし）。内容は嚴家と熊家との婚約成立について。

第五五号

（五九号）

三月末、北

京より。

総五〇一字

（一七六）

○われ今夏北京を離れんと思う。眼中待つところのもの三、兒女の結婚
邸宅売却、今後の居住地決定なり。○平生の師友のうち、その学問・行
誼・性情・識度、人をして低首下心せしめるものは呂君止のみ。餘は
死せるものに郭侍郎、呂冀州、熊季廉。その生くるものに陳太保、陳伯嚴、
菊生あり。みな各々新識を具うと雖も旧法の中に遊ぶ、品行一として議
すべきものなし。いわゆる新人物、声光燦然たるも党を結ぶこと海内に
あまねし。某某公の如きはわが心目中一もあらざるなり。

○呂君止〓秋樵。郭侍

郎〓嵩燾。吳冀州〓

大澂。熊季廉〓元鏢

（本信の相手、熊純

如の父）。陳太保〓宝

琛。張菊生〓元濟。

陳伯嚴〓三立

第五六号（六〇号）。四月初、北京より。総四六四字（なし）。内容は時事評。主として欧州情勢について。